

日本書紀傳十九卷八

和書
一〇五二號

五十六

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (65)
函號	85 1

内閣文庫



教部
文庫印

大正
印

十九八
六拾葉校合大島海濱

一日舟書地傳十九八
五五壽義

内一三六八三號

何小乾せばう七日千ざらむと有る此歌貫之集四卷
天慶三年内の御事ありて夏後と有り又天慶四年三
月内の御屏風の圖夏神樂と書して行水の上の祝へ
る川社川浪高く仰がる哉と見え忠之集小水の邊
の神樂する川上の心流氷て行水小甚と名越の加具
良面直あど有て歌ゆも詠こは官家各義抄色葉字類抄
あど小神樂を加具良と訓おせられ又天孫本記小猿
女君等主其神樂と有る更あめ諸書小載る所皆同ト
けぬば其古言ある事知らる然れども言意未思ひ得
ず師説を聞有る人の話小神樂ハ神意良し可笑
しそ所態を成して神を象樂がせ奉るを云と云水

日本書紀傳十九

三百九十二

加紀小羅
 日本紀
 此加紀
 有和語
 此記
 此の
 如く
 小若

加紀の事其の初てハ右に引る夏後と云ふ所のハ合
 ざれども其本著く所ハ此天磐戸の古に依る事あり
 ハ必神惠良の説然る可し其言義
 樹ハ古事記の事の下小云ハ○以天香山之真坂
 之真坂と見え古語拾遺の以真辟著爲鬘次羅著爲
 手纏と有て三共小打合て此ハ異説無しと雖も右
 の真坂樹ハ上ふる天香山之五百箇真坂樹と曰字不
 る事其疑無小ハ非ずあり有ける彼ハ木小て麻佐
 加紀あり此ハ蔓草小て麻佐紀あり同字を並べて書
 ぶが了一ハ坂を佐加一ハ佐との訓べず小非水ハ
 種二ハ思回する小此ハ一句脱なる小て天香山

之真坂樹爲鬘次羅爲真辟爲手纏以真辟と有けむ
 が其真賢木を以て鬘華と爲給ひ傳を漏せるが故
 の真辟を鬘小羅を手纏の事の混ひたり者とて
 所思えたり然れ此の真坂樹ハ右の大御幣の五百
 箇真坂樹と同物あり有れども彼ハ種二の幣帛を並
 懸る故小五百箇の言を冠せ此ハ唯頭料挿す
 あり故小其木名を云ふの事あり上三百四小註
 如く己小景行天皇御紀ハ熊檀葉を鬘華小挿す
 事を歌ハせ給へり然る常葉木を頭挿すハ却小
 古風小て華あつを折挿せるハ遙小後世の然あり

之曉る可出雲風土記大原郡佐世郷家正東九
葉頭刺而踊躍爲時所刺佐世木葉隆地故云佐世と有
思ふ可賢木を髪華の頭給へりと同北あるを
爲る事ハ當るおる事通證小此之後世の神事の時小
冠の上ハ挿るこ心葉の事ハ當て云るハ面白事亦
小万葉集十二卷云梓弓末者師不知羅然真坂者君尔
縁西物字一本歌云梓弓末乃多頭吉波雖不知心者君
尔因之物字集中直坂之辞多而與今俗語意同此歌或
作心其義可以見也至今大祭祀懸日蔭蔓心葉於冠上
蓋日蔭蔓以蔭爲字綴之遺意心葉以直坂樹爲蔓之表

示也と云るハ然る言あり又其引る万葉十九四十新
嘗會肆宴應詔歌六首の中小島山尔照在橘字受尔左
之仕奉者卿大夫等と見え次小足日本乃夜麻之多日
影可豆良定流字倍尔也左良尔梅字之奴波半と有る
始の警華ハ即心葉而次ハ梅髪の上小心葉を挿む
と云義あるを思ふ可一江次第大嘗會應詔會條給
王御挑頭と有る下小親王紅梅大臣柳藤華納言櫻華
参議冬と見えたる是あり後世の至るハ枯華葉
心葉金銅梅花也と有るハ強小其のこハ限る
さゆけ一通證小見えたる於遺集小人の許へ幣を

結びて遺^遺すとして能宣^宣せり、^結契結べる心葉ハ辛向
の神が知べうめけさる有ハ更^更なり、^源源抄ハ舞人ハ
冠を著るハ心挿頭花有ハ其時^時の抱を用ふる由云る
ふど皆^皆此ハ出たる事ハ内然^然ハ類要雜要抄ハ圖^圖共
の出たるハ心葉ハ八股^八くず其始^始眞坂樹を挿しを眞坂
を眞性^眞の義ハ取て其^其心と轉して心葉^心ハ云る
みて賀茂祭の桂輪荷祭の抄^抄ふど共ハ其同種^種の物ハ
ふむ有ける通^通證^證ハ今紀熊野二月卯午日土人皆挿賢
佐國ハハ彼^彼此有^有を見及^及ハ所^所あり又^又其^其引^引る天曆^天三^三年
藤^藤花^花御^御膳^膳折^折敷^敷心^心葉^葉藤^藤花^花ハ云^云ひ源^源氏^氏繪^繪合^合卷^卷ハハ刺
心^心葉^葉ハハ云^云るあり其^其物^物を^を忍^忍清^清めてハ眞^眞坂^坂樹^樹を刺

多須及加氣

す習俗^習あり^{あり}を其^其ハハ
心^心葉^葉ハハ云^云る者^者あり
と云^云ひ拾^拾遺^遺ハハ眞^眞辟^辟着^着爲^爲鬘^鬘と有^有ハハ右^右小説^説ハ
如^如く此^此の眞^眞坂^坂樹^樹ハ木^木名^名ハハ然^然る^る鬘^鬘草^草を云^云るあり
る内^内ハ其^其眞^眞辟^辟を^をハ纏^纏て爲^爲る一^一句^句の腕^腕たるハハ右^右小
辨^辨へたるハ如^如く一^一の錯^錯乱^乱ハ出来^来ハハあり高^高橋^橋氏^氏文
ハ取^取日^日影^影ハ爲^爲履^履以^以蒲^蒲葉^葉ハ美^美頭^頭良^良ハ卷^卷採^採眞^眞佐^佐氣^氣着^着ハ
爲^爲帶^帶足^足纏^纏結^結ハ供^供御^御雜^雜物^物ハ結^結銘^銘ハ有^有る續^續きを見
るハ此^此の眞^眞佐^佐氣^氣の用^用ハハ纏^纏と敷^敷るの^のハありず帶^帶ハ
ハ足^足纏^纏ハハ又^又供^供御^御雜^雜物^物の銘^銘ハハ爲^爲の^のありけり
借^借記^記傳^傳ハ五^五十^十ハ此^此段^段ハ如此^此變^變ハハ眞^眞折^折を用^用ハハ纏^纏を

ハ手次小爲たゆと有^ルハ後ハ万葉延喜式其^録
の書ハ専日蔭髪のと有て却りて真折髪と云事ハ
見えざるハ疑ハ一歌あが小真折暮て詠るハ蔓草不
る故あり頭ハ舞るハ蔓を云ハ非^中略賀茂翁詠ハ
此記も書紀も本ハ真折を午次マ一^{日影を髪}して
有けちを後ハ誤りて右の如く日影を午次小真折を
髪ハとハ書るあめ真折ハ長く強き物あハ午次マ
爲べく日影ハ弱き物あハ午次ハ堪べうと
有り此説實ハ然る言あハ云ハなるあて明うふ
ハ但真折の午次ハ云事ハ古書ハ見えたる事無^レ
ハ此ハ猶疑ハハ云ハ云ハつちを古史第五十五段^後

私記ハ爲髪ハ
難と有と知
てむ此疑無^ク
可き者なり

ハ己ハ右^高の橋氏文を引れたるハ實ハ然る言あ^ハ
但此ハ脱句の有べき事を思漏されたるハ古來諸家
の記共ハ然^ハ此ハ真折樹^ハ有ハ髪華の料みて本
名あて異ふハ其午^纏ハ爲つる麻佐紀を古事記ハ真
折古語拾遺ハ真辭と有ハ借字ある内ハ拾遺あるハ
少據有て所思中其ハ下ハ云べ一継体天皇七年御紀
句大兄皇子御歌ハ^{藤左兼巨羅多多}金阿藏持梨と有
を引て冠辞考ハ真辟暮の物ハ^{糾ハ}纏あ^ハ如く妹
と夫の互ハ午を相纏へるを云ハと云れたる北御歌
の趣あて其^纏あ^ハ知^ハ右^{三百ハ}引る古今集
採物歌ハ深山ハ^{霞降}外山ある真折の暮色白

あけのし新勅撰集の外山の霞降く谷繁き真折の
葛跡を埋めしあて有ハ髪を云ハ非ず蔓草を云る
葛の事あり借此ハ真辟葛ハ千緞と爲る説宜しと雜
も記傳の右の續きの真折も髪を用ひざるハ非ず
外宮儀式帳あり真佐支乃髪を爲る事二處の見元古
今集採物歌の卷向の穴師の山の山人と人も見るが
ハ山髪せよ此を奥義抄ハ神樂するハハ真前の葛小
て頭を結あり此を山髪と云ハ註せりも有て
凡て髪ハ日影を主とて真木綿忠冬指穂ふと
猶撞ニ物を以て物爲る事次ハ云ふ如く有ハ時

ハ隨ひてハ真辟をハ髪ハ爲る事ハ有しと見ゆれば
強ハ全ハ無しハ云へくざるハ冠辟考ハ右の
深山ハハ霞降く云ハの歌を引て其説ハ想ハ常葉
多草草木ハ冬ハ初ハ去ハ去年の古葉の色付落る物不
るハ殊ハ山の岩木ふと纏へる常葉の葉ハ南天
燭ハ似て黒ハ有ハ冬の初ハ古葉の得る云ハ紅丁
侍の是ハ山行く時專目ハ着て見ゆれば右の如く
ハ詠つて云ハ云れハ借於道ハ真辟と書れハ物有て俗ハ
麻佐紀ハ葛と云物あり本草ハ四時不凋厚葉堅強大
子結石ハ花而實昔と有ハ此ハ別當九ハけハ

全三頁
三十三
本紀本記
以羅之四字引續
く文ふゆけり

了但冠辞考の万葉七卷十一丁の皇祖神之神宮人冬
葉著讀音^常尔吾又將見之有を古今六帖真祥昔
條の入て歌工^七麻佐紀豆良と有る古訓^七て理の七
叶へる云と云れ^七右ハ和名抄^七羊類^七の冒^七類一名
山^七羊和名^七夜^七萬^七都^七以^七毛^七俗^七云^七山^七乃^七以^七毛^七と見^七元^七名^七義^七抄^七
の^七著^七類^七の^七右^七の^七二^七訓^七有^七其^七種^七類^七の^七草^七解^七と^七云^七物^七有^七此
ハ冬^七之^七猶^七勸^七有^七物^七有^七故^七ハ冬^七之^七草^七類^七と^七云^七物^七有^七此
有^七有^七け^七の^七和^七名^七抄^七の^七解^七和^七名^七土^七古^七呂^七漢^七語^七抄^七の^七解^七老^七二^七字
之^七有^七是^七の^七土^七古^七呂^七ハ^七常^七有^七の^七義^七有^七可^七一^七故^七登^七許^七呂
豆^七良^七の^七所^七常^七敷^七之^七續^七ける^七の^七ハ^七六^七帖^七有^七ハ^七言^七を^七改
め^七たる^七の^七て^七證^七と^七ハ^七成^七難^七き^七事^七を^七思^七落^七た^七ら^七る^七又
九^七卷^七三^七十^七六^七丁^七の^七冬^七之^七草^七類^七都^七良^七等^七抄^七の^七解^七有^七る^七又
ハ^七著^七と^七同^七音^七の^七故^七ハ^七借^七たる^七物^七也^七此^七ハ^七登^七許^七呂^七豆^七良^七
之^七長^七く^七遠^七續^七く^七を^七云^七れ^七ハ^七真^七祥^七昔^七の^七訓^七ハ^七非^七る^七也^七若
此^七を^七も^七麻^七佐^七紀^七豆^七良^七と^七訓^七べ^七く^七ハ^七神^七事^七に^七用^七る^七常^七葉^七本
を^七一^七も^七賢^七本^七と^七云^七か^七如^七く^七此^七も^七髪^七と^七成^七す^七可^七き^七常^七葉^七本^七
能^七之^七考^七ふ^七可^七き^七事^七也^七○^七髪^七公^七傳^七十^七百^七七^七十^七五^七百^七十^七八^七
己^七も^七註^七せる^七が^七猶^七此^七の^七其^七義^七を^七委^七く^七爲^七べ^七る^七其^七ハ

和名抄の髪和名加都良髪以者所以被助其髪也と有
ハ鈴屋翁の今云ふ加毛自と云物也と云れぬ如
く其ハ吾髪の上ハ人の髪を取足して都ての髪を大
く大小銜成すと云ぬ又古書の日影髪髪髪髪と云
云るハ右の漆髪を爲るが如くハ髪の上ハ被りて
其髪を銜成す事右ハ同トハ鬘ハ頭注密勘ハ山髪と
ハ神樂するハハ真祥昔のて頭を結ふハ髪束綿と
云物を額より後の引廻して結ふハ御神樂ハ在る
事ハゆと云るハ其項現ハ在ハ状を見たりハ任ハ書
せりハ古ハ神事ハ仕奉るハ必然物爲つるハ

○日本書紀傳十九

○三百九十八

石屋戸伏船置
而云之見元又

高橋式文の取
影爲壇
新嘗會舞宴
歌小足見元
麻之多日影
良家流も見元

大神宮祓宜譜圖帳小天日影着 諸命爲護天と見元
又右少引る三箇重事小籙之云草をハ日影草と云ふ
神代小此草を髪と爲たる事日本紀ハ所見たりと云
有ハ其傳絶て無一とハ云べうと云ふハ皆四時
祭式供新嘗料小日蔭二荷と有ハ江次集尙祭係小相
髪具日蔭髪と見元たる髪料少生あるを被用たる
たる少ハ大嘗祭儀を見り小主一々ハ時少ハ木
綿髪を掛け決めて重事少ハ皆日蔭髪ある少ハ
親王以下及群官并内侍以下女孺以上吉摺衫各一領
と有る下小祭及宴會同著加日蔭髪と有り又其神御

物小供奉物部の人共の齋場少ハ發て大嘗宮少運
少行列次第少大抵ハ皆木綿襪日蔭髪を著る由ある
を以てハ神代少ハ以降神並て世少用ハた少ハ日
蔭着ある故ハ然ハ大祀少ハ殊ハ其物を以て髪
とハ爲りたる少ハ若少ハ記傳ハ五下小近代ハ百糸
又ハ青糸を組て冠の左右小垂るを日蔭髪と云ハ彼
物共少代用ハらる少ハ少ハ有少ハ次ある籙のハ少云
を考合す可一 其所少ハ云ケ知ク髪を頭少ハ垂るハ
蔭ハ御蔭の義少ハ右の日蔭着を以て皆髪少ハ日
髪と爲る事實少ハ其本着少ハ所此少ハ因少ハ水ハ日
蔭着眞辟着少ハとを始とて想て葛草を用ふる少ハ故

實あるが故に和名枚小千歳草和名阿百部 和名保七 米豆良 止豆良
 有を始て凡て都良ある物を加豆良と云例而彼絶
 体天皇御紀の誓左無豆遷を神樂若歌小万佐支乃可
 川良と云ひ又也万加川良と云川同枚小葛を久須加
 豆良草蕨を於無奈加豆良五味を作祓加豆良此紫葛を
 衣比加豆良防已を阿字加豆良忍冬を須比可豆良細
 子草を久曾加豆良通草を阿介比加都良と有る中
 ハ髪不用ひざるも有あめども共ハ其類あるが故に
 加豆良とハ云ふ内右の忍冬ハ已ハ内藏齋式大神祭
 條不忍冬花髪と云事の有ハ例一て思ふ可き者なり

又同枚ハ藤を布知と云ひ絡石を豆太と書て共ハ
 葛類ハ收めたる其等とハ藤加豆良又ハ葛加豆良
 と云るを猶葛草あまざるをハ髪と爲る事多し
以知べしハ花縵ハ万葉八ハ櫻花歌ハ媛嬬等之頭挿乃多
 米尔遊士之縵之多是等敷坐流國乃波多豆尔間尔鷄
 類櫻花能丹穗日波母安奈何と有る此ハ挿頭と云
 縵と云爲つる由あり十九ハ三月三日宴歌ハ漢人
 毛拔浮而遊之今日曾和我勢禁化縵世余と有ハ桃ハ
 可一四ハ十小葉投縵今爲妹半夢見而又葉根縵今
 爲妹者無四乎七ハ八小波祢縵今爲妹半浦若三十一ハ
 五小波祢縵今爲妹之浦若見咲見温見著四紐解と有

此八四四十一一十四ふと小翼酢色之と有る十二
 二十小唐棟花色之移安と有るハ其花の蔓を云ふ
 可一又續紀小天平十九年五月五日庚辰太上天皇詔
 曰昔者五日之節常用菅蒲為比纏此來已停停此事從今而
 後非萬草蒲纏者勿入宮中と有る此事盛行ハ此
 ちと所見二万葉三四十小霍公鳥鳴五月者菅蒲花攝
 辛玉爾貫一云纏爾將為登二十菅蒲纏將為日十八
 一安夜賣具佐加豆良爾勢成日又一三十保止二支須支
 奈久五月能安夜女具佐余母疑可豆良伎有其糸
 比小加都良賀氣香具波之君半と有る七物ハ云云

九首昔樂五科

今ハ仕造百食花
 纏三枚疊置
 豆思捧贈實
 客各賜此纏
 三首の可加我
 豆良佐波之伎
 香母と有る百食
 以て花纏と為
 たる所ハ五本
 半夜疑纏加豆
 良爾志都二阿
 素思久良佐奈
 又七波流楊奈
 宜可豆良爾字
 前志

ねと右の菅蒲纏あり正書有式ハ菅蒲纏又懸盛難
 花十棒盛居臺三日平且申内侍司列設南殿前此所
 見たり又万葉八一十一小秋稻纏を詠る贈答ハ吾之詩
 有早田之穂立造有纏曾云二人吾妹兒之葉跡造有秋
 田早穂乃纏雖見不飽可聞有此稻穂穂をも髪髪をし
 て翫ひたるちりけり又十七三十ハ之夫多尔能安里
 蘓乃佐佐尔於担追奈美余執久流多麻母可多與理尔
 可都良尔都久理伊毛我多米底尔麻吉丹知底有る
 多麻母ハ玉藻乃海松ふどの状ハ日影暮小似通ひ
 たる者ありハ其を髪みとハ詠るあり又十八一小雨干

右ハ
同
物

又三柳者見人之蔓可爲目生來鴨又九百磯城大宮人之
 蔓有垂柳者雖見不飽鴨又十六贈蔓大夫之伏居嘆而
 造有四垂柳之蔓爲晉妹十八十四不可久之許嘗揚奈
 疑可豆良根多努之久安撫婆米るとい見えたるハ柳
 を以て髪ふハ作ゆる少く如此く種ふるふ有ける
 又發語ハ冠録考ハ万葉卷四小昔揚ち著木山尔云
 二此ハ柳の髪と云ハ卷十一ハ昔揚著山云二ふと揚
 の加豆良ハ柳の糸して造りて頭ハ懸を髪と云ハと
 三これたがハ女ハ右の中ハ柳頭するをも共ハ加豆
 良と云れとも共ハ上ハ下ハハ賀茂松尾日吉等の神事
 下ハ垂るこ意を以て云ハハ賀茂松尾日吉等の神事
 小葉蔓楓縹等を掛る事有ハ其ハ賀茂大神舊記ハ于
 時御祖神等戀慕哀思夜夢天神御子云各將造吾造天

羽衣天羽裳短火奈舞待之又銘走馬取奥山賢木立阿
 禮悉種ニ緑色又造蔓楓縹飾待之生山本天神御吾將
 來也御祖神即隨夢教令彼神祭用走馬并蔓縹楓縹も
 有る此を諸髪とハ云ハ其蔓ハ枕草紙ハ蔓甚可ナカ怜
 一祭の飾神代より一て然る柳頭と成けむ甚下賞
 九一物の狀も甚可ナカ怜ハと有ハ新古今集ハ如何なる
 ハ其神山の蔓草年ハ經ぬとも二葉ふるふと申中
 古の歌ハ多く詠る是ハ山桂ハ天孫降臨章ハ湯津社
 木杜木此云と有る是を云ハ貫之集ハ人ハ皆桂柳頭
 一て千早振る賀茂の御阿禮ハ逢ハ日ハありけり有

て葵の逢年日を係たり新撰六帖又夫木集小社葵苑の頃
 一成れハ神山の本有ぬ桂カクレガ隱處カクレガ無一ふと詠ハ此
 以髪不掛る物あるう然る名とハ成れハあり可
 然れハ上ハ擧たる諸の髪を除てハ右の葵又桂桂の髪
 亦一種少て神代よりの事あり知べし其事樹別
 云ハ序ハ註す可きを此ハ唯髪の別ハ引るのの引るの
 之朝不量主之明暗也孔子家語ハ今鮑波子食於淄
 能其足注ハ葵之為物頭葉隨日轉故日衛其足也也
 元之選注ハ葵之為物頭葉隨日轉故日衛其足也也
 曰葵性衛足朝日出則葉葉向東頭夕陽在西則頭
 向日類心睇日也善曰淮南子曰聖人之於道猶葵之與
 日雖不與然始其御之誠也云ハ本單細目ハ時珍
 曰葵爾雅翼云葵葵者也葵也葵葉向日不使無其根也
 以樹之也と見えたり右ハ依る時ハ阿布比ハ仰日

義ハ御祖神の天神御子を哀慕給ふと髪髪ト
 給へるも其草の性ト天日ハ向ふを所因ト髪ト
 給へるも上三百九少云るが如く此ハ以羅爲髪以
 真辟爲手額ト必有べき所ありハ此髪ハ日蔭髪也
 事灼然きと猶例を考るハ四神出生章第六一書ハ因
 投黒髪此即化成蒲菡と有ハ傳百七十少云る如く
 緒ハ貫たる黒き玉を投棄給へるが其状を摸エヒて紫
 蒼カシラト成れるふゆ又上章夫照大神の御装の所不使
 以ハ坂瓊之五百箇御統纏其髪髪及腕腕ト有る髪を古
 事記ハ御髪と有ハ此ハ何れハ蛇の物を以て
 御髪ト爲させ御在一坐上ハ殘る玉を裝飾させ給

へる如く聞成さるれば、然し非ず本より御鬘は玉
ふらぐ上小指又八板瓊之曲玉を殊小懸させ御在
坐るゆへ其ハ殊更なる御事と聞ゆれば、並ての例ハ
ハ非ず、諸此の至りて天鈿女命の目影を、も鬘を成
一給へるハ記傳ハ五十三小日蔭ハ天皇の大殿を稱
へて天之御蔭日之御蔭と隱坐すと申す此ハ天を蔽
ひ隔て日光を蔽ひ隔つる蔭と云義あり此鬘を頭上
より出るこも本ハ日光の觀ゆきを料隔つる故
小日蔭とハ云ふゆへ云れハ甚と妙ある説ゆて古
事記ハ尔天字受賣白言益汝命而貴神坐故歡喜咲樂

と有ハ記傳ハ四十六小此御鏡を示奉ぬるも、小
日神の御光の移りて全等ト照炫くを以て汝命
小勝りて貴神とハ即此御鏡を申し成せる者あり彼
日蔭を爲たるも鶏を鳴せたるも皆此貴神坐て世
を照し給ふ事日神小同ト由を示したる者あり
云ぬれらば故く其御光を鏡へ隔つる爲小物爲れ
たゆ鬘ありハ殊ハ其狀別ハ爲出給へりけむと不
正所思えたりける備此より後小日蔭鬘を掛るハ其
美たるゆへ例を取て萬の神事ハ
ハ社奉るるゆへ此ハ就ても鏡屋大人の神事ハ
不貫て甚しき學祖の御在事を用ひたるゆへ
日本紀ハ記云爲鬘以蘿和語云此加介加都良と有る

日本書紀傳十九

四百五

を思ふ可
○蘿ハ此にてハ以蘿為手纏と云ふ續あり
とも上百三十九引和名抄依る時ハ以蘿ハ上ハ
属く言ふて即蘿髪之事あり斯れハ此ハ御紀より古
くハ為髪ニハカウチヲモテ長キ以蘿と訓た内一所あり下ハ為手纏以某ト
有けむぐ下ハ字の脱た内一うも小然も續きと成以
ゆけむ由己ハ辨へたるハハ蘿此云此新羅ハ古事
記ハ天之日影を作さ拾遺ハ蘿者比可氣と注
されたり四時祭式供新嘗料小日陰二荷と有ハ此事
已三百九十九ハ云ハ記傳八五十一小齋宮式供新嘗料物小
日陰二荷とも日影者二荷とも見ゆ借和名抄祭祀具

小蘿髪者本紀私記云為髪以蘿和語云比加又等類小
蘿日本紀私記女蘿也又松蘿一名女蘿和名萬豆乃古
云蘿比加今世加古今物物名小佐我理基都と有る是ハハ算疏ハ
蘿無苔也俗謂日蔭蒼と有ハ女蘿ハ松枝ハ生て其葉
く色青く帯の如くある物と漢籍共ハ見元たれハ佐
賀理言てハ名ハ松上ハ懸ハ由あり此物奥山あり
てハ生ず又乾てハ色青くして枯すと云堀川百首小
頭仲朝臣の露懸ハと枯る世も無しと詠るも此由
小ころハ有ハ然ハ小菅家名義抄と見るハ蘿と比加
今又古今と有ハ松蘿ハ萬豆乃古今又佐賀理古今又

佐流乎加世と訓て女蘿同と見えたり此小因て思ふ
の蘿と松蘿女蘿とハ共小日蔭と云物ありども同ド
うらざら可一蘿ハ山中淨地の木蔭の生ふる物あり
俗小瓶乃禱又ハ瓶乃乎加世と云ふ苔類の立延びて
蔓草と成れる者あり松蘿女蘿ハ一名を無苔ハカリゴケとも云
るか如く實小松枝の葉なる苔ふれハ此小ハ佐流
乎加世と云ふ名も有る可一然ハ地上小這へる
と樹梢の葉なるは是程の差別ハ有る事あるを和
名抄小蘿と女蘿也と云て又松蘿一名女蘿と爲て一蘿
小合せたるハ誤小と有つて造酒司式大嘗祭料

物中小真前若日蔭山孫組ヤコシゴケ各三摺と有る日蔭ハ右の
蘿山當川山孫組ハ當れるを通證小其山孫組を佐流
乎加世と訓て和名抄蘿比加今松蘿萬豆乃古介一云
佐流乎加世然則古者二物俱用之而今俗日蔭海抜麻
城湯為一物不是も云るハ然る言中ハ然れども其物を
分るふハ蘿と松蘿と右の如く差別の有る事ふれ
ども共小日蔭ヤコシゴケ不用ひたり一事を思滯せるハ誤あ
り故今定め云む小蘿ハ比加介又古今又上三百二小
引る和琴の緒を瓶乃半賀世と有る俗小瓶の禱も云
るも一あり實小瓶の尾の狀ハたる蔓草ハ山次子松

蘿ハ此も同一日蔭あぐく一名を松苔又垂苔又猿麻
 械又ハ山孫組と云物少そ有ぬ可き然れハ物麻
とハ同トウラウさる物あるを一小爲るハ誤る猿麻械
第五四段徴小本朝事始を引れたるハ祖不手賀
世と有る粗字ハ松西改めりれなるハ可一吊ガ見
たる本ハ何れも物有山諸今試る小猿麻械ハ此差
く弱き物ありて物麻械ハ知ざるハ古人也此差
別ハ委一カクさ山見えて藻鹽草小日蔭一名
半白草一名垂苔俗名物乃毛賀世又猿緒賀世
其二を一小爲たれと云諸國を遊遊めて山單人小
問ふハ猿麻械ハ物乃毛賀とを一小爲す一て別るハ
然れハ此等ノ車強ハ書典を云頼あり一さや
 記傳ハ万葉十九四下新嘗會事宴歌小足日本乃夜夜
 之多日影可豆良家流宇倍尔也左良尔梅半之奴波牟
 十四三十譬前歌小安之比奇能夜麻可都良加氣麻之
 五下

波尔也衣可多伎可氣乎於吉夜可良佐武也有る此小
 可氣と詠るハ蘿ゆめと云ハれ猶古今六帖小常葉ふ
 日蔭葛今日一ころ心の色小深く見元けれ後撰集
 小奥山の日蔭葛懸てふと思ハぬ人お乱れ初けむ新
 勅撰集小今日小逢ふ豊明の日蔭草何れの代よ懸
 小初りむ足曳の岩倉山の日蔭草挿頭すや神の御命
 ふるくむ源産之集山千早授る神の挿頭せる日蔭小
 小解けても物を思ふ頃ふと見元此式部日記あり
 日蔭を圓めて挿ひたる髪とも白を物思して結ひ漆
 九のと云ひ猶新撰六帖小見る度小日蔭葛何あぐく

昔を係て思水やハ爲る又然計りや本の下暗き奥山
 不在へくも無き日蔭草のふ又夫木集の今日祭る初
 の忌垣の玉日影昔の事と尋て不來ふふと有り傳記
 万葉二の山蔭影亦所見と有る山蔭を枕言とて
 影ハ日影の意小續けたる事右の十四の歌少知て
 一今本小影ハ山字を玉誤り十三小雲聚山蔭と詠
 るも細小無たる蘿あり此山字を玉誤り山と云
 水戸右の二卷の玉蔭ハ已小上三百九十九の細書
 あり云る如く又一種別あり又雲聚玉蔭も本の任小
 て然る可くも右の夫木集歌小玉日影と云る玉も美
 稱へたる名あれバ古ありて然るまじき中非れバ
 り○爲手纏ハ上三百九十九小引る私記の訓小爲鬘ハ蘿
 も有る其例一て此ハ爲手纏以眞辟ふも有けむを
 下小字の脱たるある可一高橋氏文小採眞佐氣眉天

多須岐仁加氣爲帶足纏ハエヒ結天供御雜物ハエヒ結天
 有ハ上三百九十九ハ云るが如く薛荔ハハ蘿ありて
 遙小勝りて強き物あるが故小手纏めて帶あり足纏
 めも結たれハハハ然れハ古事記小手次繫ハエヒ天香
 山之天之日影而爲鬘天之眞折ハエヒも有る本ハ手次繫ハエヒ天
 香山之天之眞折而爲鬘天之日影ハエヒも有けむを誤り拾
 遺小以眞辟ハエヒ爲手纏ハエヒも有る以蘿爲鬘
 次以眞辟ハエヒ爲手纏ハエヒも有けむを誤れる事可事右
 小引る私記小爲鬘ハエヒと句讀せたる小照一辨不可
 き者あり一記傳小此手次ハ蘿を用ひたれハ一事書
 紀も古語拾遺も皆同下事あり若く後

△但名の許葉は佐
 二卷も云のとも
 限る可くすす葉
 二卷十九下小竹
 之葉者三山も清
 十卷六下小竹葉
 亦薄太神更露
 と有の上三百十
 引る條歌小佐
 乃蘭波仁云とて
 百川

二二安伊佐ニニニ云事有川此ハ佐ニ佐ニと唱
 たりう佐阿佐阿を如此書るう何れ小在れ彼小竹葉
 の音小和せたる聲よめ出つる事ある可し云れた
 りハ實小然る言小あむ有ける 右ハ神樂の阿知女法
 云るを此其前張小至小阿知女於ニニ志ニニ
 と云事者宮人前張の歌小就て阿以志ニニ云
 夜乃小管破良前波の歌小就て阿以志ニニ云
 を殖春以下小阿年佐ニニ云云右の如く志
 ニニニニも佐ニニニニ云云ハ志も佐小轉りて
 同ト言あるあて共小竹葉の聲小合せて敬言躡りて
 成せるあて人を進む小佐阿ニニ云云物を逐小
 小志律ニニニ云言の起れるも亦此小出た小者
 見上三百六小云る如く本朝事始小猿樂の事を本ハ
 十下 杖流篠舞と云し由あれハ天鈿女命の小竹葉を千草

小採して舞奏でさせ給ひ如此くして日神の大御心
 を取奉りて給ふ中も常夜往ける世中の奴氣を神
 掃ひふ拂ひや御在り坐りうバ自餘の諸神も小竹葉
 の音小和せて雜し立給へるが例も成りて後あても
 神樂ハ必然る事を擬ひ彼行るとあて有ける古
 語拾遺小此より後小日神の出生る所也當此之時上
 天初暗衆俱相見面皆明白伸手歌舞相與於日阿波禮
 阿那於茂志呂阿那多能志阿那佐夜慈飯慈と有る阿
 那佐夜慈の下小竹葉之聲也と有る本注ハ小竹葉の
 佐夜ニニも鳴を以て清ササけく明ササけき義小寄せた小

一者あり能佐抑佐能神天皇三十一御紀大御歌小那豆能紀
一丁小著鐸之弟の下の組云るは如し上三百五大
后の御歌小許能波佐夜藝云加是布加年登須と又
加是布加年登曾許能波佐夜牙流と歌せ給へるハ木
葉の音の爲る事々宣へる事川佐二七依夜も共小
竹葉の縁語又神功皇向御紀小太子至自南唐是日皇
太后宴太子於大殿皇太后與鵬以壽于太子因以歌曰
虛能弥企破和敏弥企那邏傷區之能伽弥等虛豫拜伊
麻輸伊波多ニ須周致那弥伽未能等豫保担保担茂苦
陪之訶武保担保担我流保之摩克利虛薛弥企層阿佐
孺鳩齊佐武内宿弥爲太子答歌之曰許能弥企鳩
加弥雞武比等破曾能克豆弥干輸再多氏ニ于多比克

菟伽弥雞梅伽墓許能弥企能阿柳拜于多那濃芝作沙
と有る上の佐ニ下の作沙も共小右引る神樂譜
の佐ニニニも同一事あり其御歌小就也難させ給へ
る御詞ある事上小云るが如し皆斯る壽詞の類ハ此
の神樂の本著る者ふれば此に限らず然る事共の世
ゆハ多在りゆを今佳小其御歌の遺れ者ゆ
右の御白の中詞武保担保担我流保之と有ハ神祝
歌舞給へる御言を年草結ハ記傳ハ五丁小多具佐
宣給へる者事ハ五丁小多具佐
尔由比而と訓べし結とハ敷枝を合せて本を結束ぬ
る事川備持と云ぬと年草とふ名あり持ゆハ自聞

△ちり鳥縣拾遺
遺抄小麻を以て
作れり枝の奴佐を
と彼社にて千草
と云ふと云ふ右
名の遺抄

△本朝華若小振拍
子天富命制衣之
以蘇麻成聲と云
ふ若くは此草
の事と云ふ出
りや

ゆ斯る所古文あゆ心を著べし神樂採物歌小美川加
支乃加美ろ美與三里佐こ乃波乎太布佐仁止利天安
所比介良志毛と有る云れなり予が説ハ上三百七藤
歌の所云内堀川百首小頭伸白和幣千草百枝小採重行
歌へば聞く天の岩門と有る千草ハ此の茅纏之類の
茅纏と同トく蘇葉を纏結びて千草持つ科ハ爲の
とあり記傳小拾遺ハ千草今多又佐と有る今字ハ心
得すと云れたる實ハ然中今某と云ハ古と故
吟の異なる時みころ云事あり又此始り引る拾遺小飲
け此此ハ古語と云ふ例あり
總本葉を千草と爲る由ある小其下小阿那佐夜憩
飲憩と有る下みも本名也振木葉之調也と有る事不

れども飲憩木と云物古今の書小未見當らず右小振
木葉之調也と有れども木葉の音も曾與二佐夜二
ニあり小竹葉小餘小異ふとざる物あり上三百八小
引る神樂譜裏書御前作法次第小宮人木綿由不志天
前張以三首千各本末仁別天拍子ハ一首二十也而本
方尔五末方仁五也凡舉仁三度拍子千用留即神乃音
振也略下て見え朝倉の下小神樂遊仕時ハ神音振と有
り又書目歌本小神音振唱と有るどハ神樂の事終て
神樂の時あり故小採物を振ハ如く爲る故實も有る
事ありども右の裏書の如くハ拍子の時小必神を振

あり可し其ハ本朝事始小押人但可讀作出仁天皇二
十五年天照大神鎮座于伊勢國渡會郡五十鈴乃川上
之時以大鹿島命為押人云押人者以神之上按中按下
按各為可印之長合三調子以左右之手鳴之為早拍子
今世豐原文右之後傳也有ハ大鹿島命小押人之成
し事之傳ハたろりて此を始と云ハ非ず神樂譜の
阿知女法本方拍子取利出音阿知女於三三三末方拍子取
於今末方阿知女於三三三本方於今と有る此於今ハ
右の如く拍子を取て音を出す例有るハ此天鈿女命
み始れり事の證有る事阿知女ハ其神名神の轉語有る

み合せて曉る可きなり然れハ餘熊木葉為草と云
る此草ハ拍子の為と阿知女法の警蹕の爲と小用
ふる者あるが故小賢木オカキの具小用ふるを以て
異名とも無く其警蹕の木葉なる由を以て号けたる
所あり又下小振木葉之調也と云ハ其餘熊木葉を印
き振ふ時ハ必於今之ハ警蹕の言ハ曲節有て唱
ふ故小調ハ云る者あり今世ハも人の嗚呼あり
事有るを御へて於今と云誠るも言義ハ置けりて其
處小鎮るするを云此古語拾遺の一節ハ昔より
我も共小廣成主を非ぬ杖意せ人の如く思ひ成り
云消つ事ありて予も別ハ説ハ無ハ今ハ此ハ

○日本書紀傳十九

○四章五

△宿禰の

證共を其て其説を立見す小我あかき説得たる心ち
ふを爲れりけり廣く神靈の如く云魁の識者
の其事意を能く説く所量の空説の如く云魁の識者
ふれたるを心苦しく所思けりめと其所出る心ち
りける所ハ詮無く御在りけりめと今あはし出る心ち
せしれける安政四年五月三日の事あり有き
火處焼ハ富栞許呂多伎國と訓べ即古語拾遺ハ
與焚燎も有る是亦然るを神祇本紀ハ舉焚燎巧作
俳優火處焼覆置而と有ハ右の二を合せて文を成
せるありて安ある事あり松記ハ此時日神深隱天下常
暗故舉燭行事謂之火處焼也と有ハ拾遺ハ乃六合
常闇晝夜不分群神迷乎足圍措凡欲度事燎燭而辨
と有ハ依ねる説あり彼ハ度事を成一行ハ燭火を

△賀茂旧記ハ天
神御子の工外給
ひ一所ハ時御
祖神等也其
哀思夜夢天神
御子云各將逢吾
造天羽衣裳炬
火奈鋒行也
有ハ炬火也此の
例ハ神を招く
とて爲る事あり
カケル

各燎して行ふ程の事あるを此ハ天般前（天般）して群神
の相共ハ神遊して仕奉らるるを過く照す爲ありハ
庭燎を甚高く擧げりけりハ火處焼とハ云るハ
處ハ地盤を云ひ焼ハ地下まで焼及ぶ程の語勢ふ
りけりハ古事記天御饗饗ハ是我所燧（燧）父者於高天原
者略天之新築之廻烟之ハ葦岳摩（葦岳）地地下者於底
津石根燒庭而と云る狀あり所あり火處焼の處ハ庭
燎の庭ハ當りて甚く力有る所あるを知べくあり但
記ハ此火者ハ處焼之不言火燒殊加處燒者將明其有
ハ處耳と云るハ處ハ何を據て言るハ也其ハ
得難き説あり者ハ何の諸右の大處ハ就て予先ハ思け
るハハ葉四卷五十四下ハ夜之穂栞呂吾出而來者

○日本書紀傳十九

○四百十六

知く神樂の才試ハ此庭火歌を以て先初小物爲る事
 なるを以て此みハ主として物なるが故なり其庭
 火歌も云ハ採物の暮歌（多めを本字の下今世不用と有る者
其味美也所波云に）
 歌を（載せて考有る下）但使火唱之と見えたる此歌小就たる儀其作法
 ありと知べし公事根源内侍所御神樂條小庭火の本
 未竟て云々見えたるハ右の如く上句を本方とし
 下句を末方として別なり（都事を宣へる者あり若
て調の御父白 又ハ散）ハ散を係け又火の燃出る事小色附
 を係て其庭燎の事を誣へる者ありけり（神名小庭火
皇神と申す
御在せるハ右の庭燎小就たる神小ハ坐すして別神
あり其ハ文徳天皇實録卷二二年十二月の下小大）

寮大八島竈神齋火武主比命庭火皇神並（後）從五位下
と有るあり始て次ニ御史小所見たる庭火神めて其ハ
古事記小謂ゆる庭津日神庭高津日神小御在り坐て
其庭火ハ竈神と稱へたる御名あり此の庭燎ハ由
有る神ありず過證ハ此字の事を周禮司燴燈燎照
祭記玉篇庭燎國之大事樹以照衆也と云ハ心得べし
 ○覆檜置ハ古事記小伏汗氣此二字而踏登掃呂許志
此五字と見え古語拾遺小覆檜檜古語字氣亦と有る
以言字小少の違ハ有る記傳ハ四下小書紀小ハ覆檜置と
 書て覆檜檜此云干諺と有る此書狀ハ置字が伏と云ハ
 當れハ覆檜ハ汗氣の形を云う字あり思惑ふ事勿れ
 又類聚國史小此云干諺布面と有る是ハ此物の上小
 立て舞ふ小響有せむ爲ハ中々空虚小設たる其臺あり

形狀の筭の如くある故に名義ハ空筭^{ウツケ}の略^カと云ひ
 たるありて聞えたる川備此を算筭御本^{ウツケ}ハ覆槽此云于
 該布祢と有る辭事ハ非ず其汗氣の事々鎮魂祭儀
 鎮魂祭式小宇氣槽と有る年中行事秘抄賢所雜事條
 引^コる舊記ハ唯小船とありて見れば亦ハ又
 釋紀^ハハ覆槽置之字介布祢布美止二呂可之或說字
 介布世と見えたる此ハ古事記小依れる訓あらず已
 小江家次第鎮魂祭條小次御坐衛宇氣衝槽上也と有
 る細書小衝宇氣神遊儀也神代上卷宇氣布祢布美止
 二呂加須義也改賢未衝槽上也略と見えたる此神代

上卷と有るハ右の覆槽置之古訓を載りたるありて釋
 紀の合るをも亦思ふ可き者あり槽^{ウツケ}字ハ名義抄小宇
 加夫祢又之岐^{ウツケ}と見え又槽^{ウツケ}を布祢又字麻夫祢^{ウツケ}と
 見ゆ和名抄小極^{ウツケ}之岐^{ウツケ}伊大馬極^{ウツケ}と有る又槽^{ウツケ}和名與
 舟同馬槽也と有る俗小馬^{ウツケ}也云物是^{ウツケ}亦ハ汗
 氣ハ木を彫削^{ウツケ}めて作らる其を馬槽^{ウツケ}と云ふ用ひ
 たりけむ^{ウツケ}此字を書れり^{ウツケ}ありて有^{ウツケ}け^{ウツケ}必^{ウツケ}其^{ウツケ}物
 と云ふも非^{ウツケ}りけむ^{ウツケ}口訣^{ウツケ}ハ伏^{ウツケ}馬^{ウツケ}船^{ウツケ}舞^{ウツケ}踏^{ウツケ}鳴^{ウツケ}也^{ウツケ}云^{ウツケ}ハ
 算^{ウツケ}筭^{ウツケ}ハ蓋^{ウツケ}以^{ウツケ}馬^{ウツケ}槽^{ウツケ}覆^{ウツケ}之^{ウツケ}登^{ウツケ}其上^{ウツケ}云^{ウツケ}ハ宣^{ウツケ}言^{ウツケ}ハ^{ウツケ}難^{ウツケ}ハ俗^{ウツケ}ハ琵琶
 ハ其槽^{ウツケ}字^{ウツケ}ハ引^{ウツケ}され^{ウツケ}たり^{ウツケ}者^{ウツケ}あり^{ウツケ}甘^{ウツケ}み^{ウツケ}難^{ウツケ}ハ俗^{ウツケ}ハ琵琶
 の甲^{ウツケ}と云^{ウツケ}物^{ウツケ}の本^{ウツケ}字^{ウツケ}槽^{ウツケ}あり^{ウツケ}也^{ウツケ}耶^{ウツケ}刺^{ウツケ}む^{ウツケ}者^{ウツケ}あり^{ウツケ}諸^{ウツケ}于^{ウツケ}該^{ウツケ}ハ右^{ウツケ}の如
 る意^{ウツケ}あり^{ウツケ}を思^{ウツケ}ハ^{ウツケ}其^{ウツケ}惑^{ウツケ}解^{ウツケ}あり^{ウツケ}者^{ウツケ}あり^{ウツケ}諸^{ウツケ}于^{ウツケ}該^{ウツケ}ハ右^{ウツケ}の如
 く穴^{ウツケ}管^{ウツケ}あり^{ウツケ}于^{ウツケ}該^{ウツケ}布^{ウツケ}祢^{ウツケ}也^{ウツケ}穴^{ウツケ}管^{ウツケ}船^{ウツケ}亦^{ウツケ}ハ^{ウツケ}海^{ウツケ}河^{ウツケ}を^{ウツケ}乗
 せ^{ウツケ}る^{ウツケ}ハ本^{ウツケ}より^{ウツケ}少^{ウツケ}て祝^{ウツケ}詞^{ウツケ}小^{ウツケ}宅^{ウツケ}神^{ウツケ}を^{ウツケ}屋^{ウツケ}船^{ウツケ}命^{ウツケ}と^{ウツケ}申^{ウツケ}一^{ウツケ}大^{ウツケ}神
 宮^{ウツケ}式^{ウツケ}小^{ウツケ}船^{ウツケ}代^{ウツケ}と^{ウツケ}云^{ウツケ}具^{ウツケ}の^{ウツケ}有^{ウツケ}る^{ウツケ}御^{ウツケ}正^{ウツケ}體^{ウツケ}を^{ウツケ}合^{ウツケ}坐^{ウツケ}奉^{ウツケ}る^{ウツケ}器^{ウツケ}名

今後世の神事小
右の馬槽を用
字書言れりめ
其本は眞
のなるあり

あり又酒槽馬槽あり（布衣）此覆槽之義如何答復置槽
る由の條あり備私記不問此覆槽之義如何答復置槽
舟登位其上合之踏響者聲也下有る事ありて唯
踏響るる一々聲を取る爲ありむあハ何を以て爲る
る事ハ足ぬ可くむを殊小槽舟を覆られたるハ必
故あり有べき事尋索る小一の奇説をある思出さし
ける其ハ于該るるも布衣と云も同物（の異稱）彼天船撥棹
船マ云類も漢籍易小刻刻木爲舟刻木爲楫と云る刻
を字書の虚其中に注して記傳の空言の義小通へり
若て天上わても神等の往來爲給ありハ石船木船あり

合るる下引く賢所
雜記小三回賢
亦其中伏船も
有る事ハ別あり
が似通ひ

とありけむは八百萬神等の此小日神を招奉る支度
あど小天の壁立極に掃巡給ひむを彼益汝命而貴
神坐故歡喜咲樂とも申す許小謀濟一たる祈ありハ
日神ハ出御在り坐すと外ハ貴神の御在り坐せば
然る奔走も無用ありとして停止しれたる意思を日神
小知らせ奉りて愈益三益三小怪一がせ奉らむも其
槽舟を傾けた其底を叩きため一者ありむ事の上
たる畏小船を覆る事ハ天孫降臨章小事代主神の踏
船抵而避之と有る古事記小ハ即踏頭其船而略隱也
と見え又播磨風土記不出雲國阿古大神聞大和國或

火香山耳梨三山相闕此欲諫止上來之時到於此處乃
 聞闕止覆其所乘之船而坐之故號神集之形覆之有
 どの例を以て此小も諸神の事治めて己の船を頓覆
 て歡喜さ吹樂ふ由めて天鈿女命の船以て衝て聲響
 うして日神の聞せ奉る事つてある思めり此右
 如く見る時ハ古語拾遺の覆置古語宇氣布祈言
 義も有る宇氣ハ此の空音ハ異つて宇氣ハ祈言ハ
 當り布祈ハ右の空音ハ當りて其の祈ハ何の意も
 云小日神ハ益て貴神の御在坐ハ故ハ世ハ此ハ
 云成れりけるも受張りて日神ハ知ハ世ハ此ハ
 神ハ示す由の擬ひを成す然る刻敷の中ハ約言の
 有る義ハ見ると可^レ擬^レびて其の辭事ハ由も知^レる事
 内然れども天上ハ何^レ計^レり奇異しく妙なる事の
 云ふ證も見えぬ事ある余ハ右の風土記の如くハ國
 否^レ証も有るむあると右の風土記の如くハ國

士小てする然る山岳を越給ふハ船を用ひさせ給へ
 る者を況て天上ハ何^レ計^レり奇異しく妙なる事の
 何^レも^レハ無^レ備又私記小宇布祈美止ニ呂可之
 訓るハ就て其説ハ古事記云於天之石屋戸伏汗氣而
 踏登梯呂許志矣今既云覆置蓋標其聲故遠尋古記加
 讀此辭矣一部之内有此類事既爲使是先師之説也
 有れハ其も中程^レ何^レの訓めて上代ハ覆置置を唯
 宇氣布世也と訓けハ事此^首引る記傳の説の如^レ
 然れハ此ハ本^レ其登梯呂許志而の言を省記さ
 以なる物々必此ハ無^レ得有^レり^レ内ける所ハ
 此踏登梯呂許志を右引る私記ハ踏響^ハ有^レハ

正しく當れる字あり記傳八十五ノ小登梯呂許志八ノ動響ト加志と云べきを許志と云るハシラシキカシ所シ知ル者ノ所シ聞ク者ノ斯レ呂志ノ須レ伎許志ノ采須ト云レ同レ古言ハハノ葉六四十一ハノ山ノ裏ノ動響ハ又二十宮動ニ尔十一ハノ馬音之跡ト梯登毛ノ爲レ者又三十瀧毛ノ動響ニ四十ハノ伊波毛等梯呂ハ於都流美豆古今集ハ天原ノ踏動響ハガノ鳴神ハ去云源氏ノ類卷ハ古煩ニ鳴神ハ也ト踏動響ハす確ノ音ハ云云有ハ書紀ハハノ鼓ト見レ跡ノ踏動響ハ有ハ借字ハ此ハ汗氣ハ踏レ脚ノ鳴トある云後世ハ神事ハ大鼓ハ

此音の擬びあり有むと云れき此時のウケ覆ハ右ハ云る如く乗行ク船ハありけむを後世ノ鎮魂ノ祭ハ氣ト槽ト云るハ馬槽ハあるを思へバ白餘ノ神樂ハ用ル大鼓ハ又其よハ再轉ル者ト所ノ思エたハ右ハ引ル瑞珠ノ盟約ハ章ハ小ノ湊ハ勅ハ之ハ鼓ト盪ト有ル其ハ有ル可レ予ハ已ハ傳ハ十五ノ卷ハ同ト其ノ事ハ註ス其ノ所ハ引ル例證ハ大抵ハ此ハ也ト同ト故レ此ハ覆ハ槽ト置ル事ハ就テ記傳ハ此ハ物ハ後世ハ鎮魂ノ祭ハ儀ハ小遺水ハ云云云レ水ハ本ハ著テ古史ハ第五ノ十ノ五段ハ徵ハ古語ハ拾遺ハ凡鎮魂ノ之儀者天鈿女命ノ之遺跡ハもレ所見タ水ハ鎮魂ノ祭ノ儀ハ此段ノ故事ハ起ル事論無ク將其式ハ儀式ハ載ル水ハ大藏錄ハ以安

藝木綿二枚實於^宮中進置伯前御巫覆宇氣槽立其上
以^神撞槽每一度畢伯結木綿訖御巫舞訖次諸御巫
女舞畢之見元江次第少也神祇官雅樂寮神樂次御巫
衝宇氣次神祇官一人進結系於葛管自一至十此間女
官藏人開御衣管振動也神代卷宇氣船不美止二呂加
須義也以賢本衝船也見元て此御巫獲女ハ共小元ハ
也結系自一至十
宇受賣命の裔の仕奉れる職あり然るを後ハ他代
より任一給ハ山拾遺の鎮魂之儀者天鈿女命之遺跡
然則御巫之職應任舊式而今所選不論他代所違九也
又云ハ臨時祭式小凡御巫取康女堪事克之但考選准

散事宮人と見えたるを合せて知べ一天孫本紀小凡
厥鎮祭之日棖女君等主其神樂舉其言大謂一二三四
五六七八九十而神樂歌舞之見えたる此を土引る
儀式江次第の文とを考合せて御巫の宇氣槽而立て
梓以て撞く時小一二三四云々も云事知る凡其即此
時宇受賣命の然宣へる小掬れる儀あり事鎮魂之儀
者天^{鈿女}宇^{賣命}之遺跡も云れたる小合せて知るれた
由と云れたるハ實小然る言亦川年中行事秘抄賢所
雜事着記云天照大神閉元岩戸隱坐之時忌部遠祖大
玉命根掘天香山真賢木^{以賢木}祭神種^敬無^取捧時中
之由是也

臣遠祖天兒屋根命禱申猿女君遠祖天鈿女命日影為
縵取ハシタカサ竹手球石屋戸伏覆擗船置而踏登動搖為神樂八
百萬神共咲之十一月鎮魂此由也于時天神語吾今隱居天下將
聞天鈿女命何以為囑樂八百万神亦何咲之天鈿女命
勝自汝命貴神坐焉故歡喜咲樂耳略于是觀之新嘗祭
神態之前黃日供奉仲鎮御魂祭其神所行事立廻賢木
其中伏船御巫登此船上以金付木歌合儻猿女亦儻唯
似彼義良有以也とも有て古とも其説ハ有ける由川
天此を以て古と稱ふも右の立廻賢木其中伏船也
有ハ即此第二二書小使山雷者採五百箇真坂樹八十

玉籤と有る賢木の用ひ所とある知る由たのける付
木とハ梓の事を云ふ可一此を江次策兵範記乃付給賢木
と有ハ後ハ梓を停止し以て賢木を被用るハ猶著
鐸之弓の遺制ある者あり備甲斐風土記ハ八代郡梓
衝神社所祭天鈿女命也と有ハ此の古説ハ契合るを
以ても其事を徴す小なる足れり此ハ神名式小
郡六座の内あるが或書ハ雄略天皇十二年九月始
祭之國造就主之子坂名井公為社司と云るハ心得ぬ
事あり其ハ左ハ右ハ此ハ天鈿女命を梓衝神社
式ハ合へるを其始天鈿女命の遺迹ある由捨遺又賢
所雜記ハ照一應する時ハ悉ハ其所以明くるあるを
猶又此ハ證○頭神明之為護此之歌牟鵝可梨ハ古事
才事あり

記小八為神懸而掛出胎乳裳緒カサカサ懸於番登也尔高天
原動而八百萬神共咲カサカサと見元九川カサカサ傳カサカサ八五十小八
引水カサカサ崇神天皇七年御紀小是時カサカサ神明カサカサ憑カサカサ後迹二日
百襲姬命曰天皇何憂國之不洽也若能敬祭我者必當
自平矣天皇問曰教如此者誰神也答曰我是倭國域內
所居神名為大物主神時得神語隨教祭祀カサカサも有る神語
即神託カサカサ多者カサカサ也又六十年秋七月カサカサ下小丹波氷上
人名氷香戶邊啓于皇太子曰カサカサ己子有小兒而自然言之
玉カサカサ鎮石出雲人祭直種之甘美鏡神羽振甘美御神底
實御寶主山河之水泳御魂カサカサ掛甘美御神衣實御寶主

也カサカサ此是非似小兒之言若有託言乎と有る託言を都
伎氏母能伊布カサカサと云神能都都言乎と有る都之懸
も同一事也仲哀天皇八年御紀小有神託皇后曰カサカサ
命カサカサ國而有寶國譬如美女之暇カサカサ有向津國眼炎之金銀
彩色多在其國是謂カサカサ新羅國焉若能祭吾者則曾不
血又其國必有服矣カサカサ天皇聞神言有疑之情と有る此
事之神功皇后御紀小先日教天皇者誰神也願欲知其
名逮于七日七夜乃答曰カサカサ時得神語隨教而祭と有る
又別小神有誨曰カサカサ略即得神教而拜禮之ふと有る神教
と云七人小託也カサカサ諭給へると有る右の神語是也又

履仲天皇六年御紀小天皇將干波路島時居島任特
諾神託祝曰略又顯宗天皇三年御紀小月神著人謂之
曰我祖高皇產靈尊有預鑿造天地之功宜以民地奉我
月神若依請獻當福慶事代由是還京具奏略日神著人
謂阿閉臣事代曰以磐余田獻我祖高皇產靈尊事代使
依神乞獻田十四町對馬下縣直侍伺有有又天武天
皇御紀小高市縣主許梅儵忽口閉而不能言也三日之
後方著神以言吾者高市社所居名事代主神又牟接社
所居名生雷神也乃顯之曰於神日本磐余考天皇之陵
奉焉及種兵器使亦言吾者立皇御孫尊之前後以送

御身之德御
在坐す多
共告給ふ御言
を人小託ひ宣

奉干不破而還焉今日立官軍中守護之且言自西道軍
衆將至之宜慎也言訖則醒兵略又村屋神著祝曰今自
吾社中道軍衆將至故宜塞社中道略軍政既訖將軍等
與是三神教言而奏之即勅登進三神之品も有る右等
ハ謂ゆる託宣と云物カ一神の人ハ教給る事乞給
ふ事の御在坐す度毎小使傳人小著令言給へ
るを神懸トハ云る事内右の顯之を阿良許登と謂る
言ある事ハ此顯神明之憑託も有る也思合す可
此字の事ハ通證不左傳敬之如神明又曰神所憑依將
在德靈光殿賦神明依憑支持以保正字通憑俗憑字
顯瑞憑通作憑と云る如又神託又託宣ふどの字
を也然訓べき事右の神言神語の事ハ備顯神明之
已小傳七卷七十一下請神之命9下小云り

○日本書紀傳十九

○四百二十五

憑談を私記小問凡云神懸者必有其神託宣令此託宣
何神哉答此與他處為異也諸神欲令日神深見奇場
故俳優万態不可殫記細女命假為他神有所託宣耳是
欲令日神深奇故也然則是假為之言未必有神所託也
と有る此説の依て記傳も今此段の神懸ハ物の著
て正心を失へる狀小得も云ぬ割タレト戲言を云て俳優を
為すを云ふ則正心マコトのて其人の得云す一ハ事を色
まが言を神懸とハ云ふ所今俗小者物の為たる如く
口走ると云ふ狀ありと云ぬたる實ハ然る消息あり
ら未其西説共ハ此の事の意を未能く書きてゐる者ふ

川け内莫ハ上天夫細女命の巧作俳優と有ハ謂ゆる
猿樂神樂の起ふる事已三百六十五丁小註るが如きを私記
あり俳優万態不可殫記と有が如く様ニの態を為し
つこも如何ありて日神の大御心を取出し出奉
ちも唯其事のこを一途小思入給ふとしてハ其態の
成一の進マの吾も非ぬ如く成て女の慎マして出
す中マを胸乳を掛出し裳緒を陰上の押垂し給ふ迄
小至山端ち極まれりマハ此あり於て歌うせ給ふ唱
雅ハ更ふ内行ひ給ふ所作也マも神の懸り云しめ成
しめ給ふ所あり及ばれける故ハ正身ハ本の細女命小

天照大神の前御
靈の所由小思
存す可き者

在るが其言ハ神の令言め給へるふれハ此を以て
神懸トハ云る所て然る真似言を爲給へるふ非ず真
小日神の御靈の依憑させ給へる所て有る内然るハ
四十一丁小古事記を引て太北の事を云るが如く其
相奉る事の是とも非とも其非小出ぬる即日神
の御心ハ御在り坐せども其非小出て謀小合る小等
ふとハ所思し坐せども其非小出て謀小合る小等
神の神託も日神の言せ給ふとハ無くも其云る所即日
若遺ハ此語無くて同ト意味有る相與歌舞との古語
神懸も俳優の中有る者作俳優也書紀小巧作能優亦云
頭神明之馬談と有る俳優也書紀小巧作能優亦云
此と連の事と聞えたるは實ハ別事の非ず事明洋纏
一然レバ別事の如く有る書様の思し小見り格遺
此を意得て書如巧者作俳優ハ天鈿女命の始り用意
云れちるハ如巧者作俳優ハ天鈿女命の始り用意

して仕奉る水進歌あり舞あり此ハ神明之憑談トハ
其事を成しの進歌あり舞あり此ハ神明之憑談トハ
の神懸せさせ給ひて然る一曲を歌ひ舞へる所ハ日神
の故小上の俳優也此と有る神懸の事を云さる小ハ子
巧作俳優相與歌舞と有る神懸の事を云さる小ハ子
細有る事あり其ハ思兼神深慮議曰云ニ其物
既備云て諸備即畢具如所謀云と有る右の天鈿女
命の俳優の事也故小然云る所て記記ハ其行ふ所を
行ふ所ハ非ずが故小然云る所て記記ハ其行ふ所を
載さる所ハ同ト然る由已小上百五十七丁よめ
以下ハ委しく註し辨ふるが如く然レバ思兼神の思
慮小て又全知命云ニ巧作俳優相與歌舞と云ハ
謀給ふとも然る神懸の有と如何てハ知給ハ
む然レバ記傳の説ハ古語有遺の主意を得られざる
ある難信者此神懸を俳優トハ別ありと云事を知る
ある難信者此神懸を俳優トハ別ありと云事を知る
法有少年中行事秘枕鎮魂祭條小載る鎮魂歌ハ八首
有る中ハ三首ハ神樂譜の採物の弓鈿首等の歌ある

○日本書紀傳子九

○四百二十八

ハ此ハ神樂ハ此ハ詔ハハ俳優ハの事ハあり其ハ首ハを
 畢ハたる引續キテ小次一二三四五六七八九十十度讀シ
 毎度申中臣玉結也ト見ル元ニたる此ハ神懸ハある事上二百
二ハ云ル鎮魂之儀者天鈿女命之遺跡ト有ル古語格
 遺ノ一條ハ著キ事師説ヲ引テ其ハ注セルガ如シ
 故鎮魂祭儀ハ御巫始舞毎舞巫部與舞三廻也
奈遠金有ハ右ノ鎮魂歌ハ合セテ舞ハハ即自餘ノ神樂ノ
 狀ハ異ル者ハあリ次ハ御巫覆字氣槽立其上以
 梅撞搗毎十度畢伯結末綿鬢訖御巫舞訖有ハ此時
ノ神懸ノ歌ハ合セ梓ヲ衝舞ふハ如シ後ノ儀

式ハ於テ其ハ差別有る者ヲ何デウハ俳優ト神懸ト
 を一ハ成シ可キ古史第五十五段我ハ天孫本紀
 神樂其言大詔一二三四五六七八九十而神樂歌舞
ト有ハ即此時鈿女命之遺跡ト有ハ思合也ハ知ル
 鎮魂之儀者天鈿女命之遺跡ト有ハ思合也ハ知ル
 坐ス天照太神ノ神懸ノ神若其神懸ノ三二三四五
 言有る事ヲ思漏さレハナリ若ク其神懸ノ三二三四五
 六七八九十ノ歌ハ百千萬ノ言ヲ添テ六言四句ノ歌
 有ル由古史微ハ云レたルハ然ル言有るガ已ハ數量
 ノ名ハ天地ノ初時ヨリ有來る事有るヲ此ハ至レテ
 其妙有ル旨ハ見ハれタメケル其言義ハ傳三六十
 小妻ト説ハるガ此ハ其取方ハ異ナル所有ハ

因て右の六言一句の法其意を得依て説べし先其一二三四
 八人蓋令見ゆて人々此神度ハ會合ハせるハ百萬
 神を云事第三一書小千時日神聞之日頃者人雖多請
 未有若此言之麗美者也と有る是あり蓋ハ磐戸を云
 不四神出生章第六二書小故使以千人所引磐石塞其
 坂路と有る塞ハ布佐具とも布多具とも云あり蓋
 擧の義ふるさ下小所塞磐石是謂泉門塞大神也と云
 ひ其泉門を古事記ハ黄泉戸と有る以て戸小蓋を
 云ふ称有るを知へきあり令見とハ磐戸の形を見よと
 心を着くむるあり以上五六七八稜威イロハ成イロハなり

面神出章小書
 神光華明彩照
 徹於六合之内
 有る大御光を申
 奉りし
 云も上御光也

稜威ハ日神の大御勢を申奉りイロハ草木小萌ふと云
 も同トトて物の殖る義あり成イロハハ日神の大御稜
 威の成就ひ給へる御事を申せるあり傳十五五十一
 云るが如く此時より天地の内あり在と有ゆるハ
 百萬千萬神の全イロハハ日神小從奉る御事の始あり此
 バ此小於て其御勢の大盛ハ成給へるを云あり此
 を以見る小石窟ハ深く刺隠らせ御在イロハ坐と云
 其御光華外ハ溢りて見えさせ御在イロハ坐ありて出
 させ給ふ御光の有けるあり以上八九十八弥心
 足ありて此ハ日神の大御稜威の真盛ハ成整ひ満足ハ

ハて給へる由申て申さバ日神御自の御述懐之申
す可き御向あり以上三句斯る時ハ人蓋を見よ稜威燃る
許小成るせ御在坐て愈御心足ひ小御在坐す由
を諸神の懇到小祈申さる小對へて天鈿女命して
今宣給へる神懸の御言あるを此時小八百萬神等の
百千萬と歌添くれけむハ彼胸乳を掛出裳緒を陰止
小押垂一膈まで顯ハるめける天鈿女命の正氣無き
狀あるを笑ひ動めるあり有けり以上四句然れども
終の一句ハ佗より雜添たる言あり以上三句
日神の天鈿女命小神懸命して合議給へるありども

某言の打續きて天地の數を極めたる言小合言ハ
高しとも效ありとも云知ず等々御事あり然云
田翁説小右の天鈿女命の六言四句の歌を數名小刻
こて用たる由ハ云わつるハ其本末や違ふ可くハ
天地の數名を並べたるハ此の事實小合へりハ
著れざめける小ち有けり數ハ天地と共ハ立て天
地の象數を盡せる者ハ一有けり鬼神と雖も此象を
出する事能ハざる甚ニ止事無き物あるを天地の開闢
中ハ此時小至る迄ハ幾百萬の年序ハ經たけり
を此小至りて數名の定れるハ云わりハ事あり
ず也 右の如く顯神明之憑談天照大神の天鈿女
命小神託て八百萬神等小令聞給へる大御命小ハ有
りども八百萬神の方小ハ一向小磐戸の首尾を思居
りれ時あり故小高天原動りて八百萬神の共小笑

いて歡こび囀樂て此より愈日神を招奉之事の却三小
成れる者ぞと思えたる但如此く説成す時ハ次小是
時天照太神聞之而曰吾比聞居石倉謂當誓並原中國
必爲長夜云何天鈿女命囀樂如此者乎と見えたる御
問答の事小合ざるが如くあれども右の神懸ハ一可
上二百四下一云る如く太非をして御卜謀小合るも其
告給ふハ日神の御心あざる御身自然ハ所知者ざる
と一して此も巧巧小能優して歌舞仕奉る小就て日神
の御心の天鈿女命小移女せ給ひて然る神懸ハ爲さ
せ給へれども御身自自ハ其神遊浮小浮れさせ給へると

所思者すのともある可けれ此後小也然る御問答の御事
の御在一坐ける小一上引る私託小鈿女命假爲
小見ても事か心小落落著著ざるあり已引たるハ如何
紀小見えたる神託の類等一き心ちふ心爲め然
假也も其ハ教給ふ事給ふ事給ふ事給の有る毎小人の口を
く諸神の請奉る事ハ無くして天鈿女命命神懸懸せ
給へる事其極意ハ天鈿女命命我を忘りて日神の
御心を取奉れる事後の顯れたるあり○古事記小爲
神懸希掛出胸乳衣緒其垂於番登也尔高天原動而ハ
百萬神共嘆と有る此其文此小ハ無て天孫降臨章第一
一書猿田彦神の所小天鈿女乃露其胸乳抑裳帶於臍
下と有り鈴屋翁説十六傳小露其胸乳云この事ハ次々

△を始ハ然る言ハ
思ひしうども此ハ
然る可しき状を
爲て諸神の笑を
催せて目神を
怪しませ奉り
かと楯へて物為
させ給へるを彼處
に其猿田彦神
の居トキ此ハ剛
しく出ま給へる
を然る可しけ
るを出ま爲て彼
神の彼神の氣を
折き給はむとの
御事あり可けれ
此ハ彼ハ必あり
す文子事傳
二三四九小注せり
如し傳
△大同類聚方カ
七年称知武佐と
有て
○右の天孫降臨事
第一二書者露
るを私記小安良波ふ加岐伊豆天と有る是なり

も怖れぬ状を示す意あても有べけぬと此ハ何
とや似着ハ一ううず聞ゆぬハ此事ハ古事記石屋
戸段ハ在るハ當れぬと云ねたるが如く此ハ在べき
文の彼由混れ入るる終由漏て傳ハるぬさ有
ける其事之纂疏ハ露乳柳裳所謂伴傳之狀と説せ給
へるハハ然る言ありハ就てハ此ハ必無て叶はざ
る文あるを思ふ可し故其掛出胎乳と云る胎乳ハ唯
乳房の事ゆて源語ハ紅の腰引結へるさび胎露ハハ
云とあど有る如く胎先を露ハハ出す中ハも殊更ハ
乳を掛出たるあり掛出ハ記傳ハハ下ハ加伎傳ハ

訓べ一搔字を書くと同トて凡て千一て爲る事ハ所
云辞あり借古ハ掛を加伎と云めと見ゆ故此字を借
て書るあり明宮段ハ掛出其骨と有る同ト万葉九十三
ハ小懸佩之小紅取佩と有る此ハ加伎と訓べきあり
借此出ハ伊陀志と訓べき理ありども伊傳と云習へ
り伊傳ハ自出るを云ひ伊陀志ハ物を出すあり武烈
天皇御紀歌ハ阿婆理豆那と詠る此ハ求め出すあり
云意あり借乳ハ婦人の人ハ見らるる事を配て甚く
隠す物あるを故ハ搔出して見するハ正心を失ひて
物ハ狂ふ状を成すあり此即神懸の状あり一様と見元

○日本書紀傳十九

○四百三十三

垂山毛敷袋に給ふ。床の中の瘠き女毛被袋に給ふ
と有る右の由あり又宇治於遺小堀川院御時内侍所
御神樂の夜略行細召すと云へば實小寒けある氣色
を爲て膝を股まで搔上げて細腰を出し戰栗を寒け
ある聲して寄る夜の更けて去る小寒き小振ち小
陰囊を歩らふ多るむも云て度上を十二三度許巡り
て走り入ふけり上中下丈抵動さけり略と見えたり
是ハ男の即座小思付て爲し事ありども古くより
女の裳を膝下陰上より裏けて神樂の庭小舞奏づる
事の有る本據ありし者あり皆天鈿女命の遺跡あり

有りける然れども此を以て此文の天孫降臨章あり
得有る事ありを知らず又右の忍垂の字ハ古
事記中卷あり人名小天押帯日子命と有る押帯の義
出流水又流波不出る有る舞酒子ハ發語して別酒
此等事ハ別あり物ハ抑へて垂らすあり故高天原動
而ハ記傳小由須理氏と訓べきなり万葉七十七小大海
之磯本由須理立波之と有ると同卷十八小文海之水底
豊三立浪之と有ると全く同意小聞ゆ若て此勅字登余
美と訓ゆハ由須理と訓まむも何事有む久物語書
ふが小世中由須理氏ふが多く云ゆ其ハ舉げて云
意小聞ゆるを此も其意を帶て聞ゆればふめ落窪物

語小初見る人こ小由須理て笑はると有ハ金此と同
 ト又登余美且も訓ある思うるゴと有ハバ而訓有る
 言ありけり前張の早歌小本由須利安介與曾て利安
 介も有ハ動マ上よ進マ上げふれ未曾ニ利安介與由
 須利安介と云るハ其を前後中置換て云ふれ又或本
 小本所ニ利安計也所ニ利安計末由須利安計也由須
 利安計も有ハ如此く由須利も云小就ても動而を
 然訓わたるハ實小當れる言ふれ又上三百七訓註も
 神樂或本條歌小止與乃安所比遠復留可太乃志佐又
 或本乃歌小須女加美乃止與乃安所比仁あど有ハ豊

源氏葵巻小所
 の御用の使を
 立ニ三たれど得
 聞え別々由須
 理満て云々有
 許小動字御き
 日本紀小由須流
 訓る由小説ハ
 鮎鉤等海入船
 敬郵又

遊の義ふれども豊ハ本すめ動む由の言ふれハ其を
 動の遊と見むも僻事小ハ非るあり右小引る今昔
 物語小上中下大抵動とけり云々ハ此小高天原動
 而も有ハ當れる所あるを思ふ可万葉三卷三十九
 良之四卷二十八下小野立鹿毛動而曾鳴大卷十七下
 小藤江乃浦尔船曾動流又四十二下小狭男壯鹿者要
 叫全動九卷二十四下小足日木乃山響全動十一卷十
 四下小雷神小動又三十三下小惡日木之山下動十三
 卷十七下小鴉音支動而寒ふど有ハ何れも動を登余
 年と訓る例ふれども猶此ハ由須流の方勝れる心ち
 ありハ八百萬神共咲ハ次ある天照太御神の大御言小
 何由以天字受賣者為樂亦八百萬神諸咲と宣給へる
 とを合せて共咲ハ諸咲ある事を知べし記傳小吃字

○日本書紀傳十九

○四百二十六

此ハ字受賣命の俳優を觀て可笑コウト云々コウト云々ハ
和良布ト訓べト云々ハ神武天皇御紀小皇軍大
悅仰天而咲因歌之曰伊弉波豫伊弉波豫阿ニ時夜鳩
中今來目部歌而後大晒是其緣也ト有る咲字之和良
布ト訓て此ト同ト又私記小阿阿咲聲也ト有るハ
思合す可ト名義抄小咲之和良布トモ惠年トモ惠ト
モ惠和良布トモ有る惠又惠年ハ物の可笑トモ時小
ハ面の彫凹コウめるを云ハ和良布ハ其可笑トモハ其内ハ
得保ち得て口を開きて聲小出すを云ハ土佐日記
ト咲ふも有ハ高天原勳而八百萬神共咲の語勢ハ似
たゆ又人皆得有るト咲ハ様ハト有る其可笑トモ

小コウト云ハ得コウト云ハ止ト云ハ又字鏡集
ハ訓ト云ハ咲字を惠和良布ト訓ト云ハ咲字を惠和良
布ト訓ト云ハ惠和良布ト云ハ咲字を惠和良布ト訓ト云ハ
撰字鏡小焉笑與和良布ト見元ハ新ハ諸古語拾遺
ハハ鎮魂之儀者天鈿女命之遺跡ト有ハ如ク鎮魂系
の儀式ハ此小定ハ事申すハ更ハ然ルハ傳ハ
ト小云るガ如ク日神の御生坐て高天原を所知者ト
初めさせ給へる御時小粗其始有る事ハ古事記小
此時伊弉那岐命大歡喜記吾者坐生子而於生終得三
貴子即其御頸珠之玉緒世由良迹取由良迦志而賜夫
照太御神而詔之汝命者所知高天原其事依而賜也故
其御頸珠名謂御倉板舉之神ト有る是ハ此第三ト

書中も瓊瓊杵^御此云宇奴籬母二由羅尔と有て此御
態の依て日神の御子を生出させ給へる御事も有ら
此ハ弥高小弥廣小神威を振起す神業もて有^中の職
員令集解小鏡速日命自天降時天神授瑞寶十種云
教導若有痛所者合^十邊干寶一二三四五六七八九十云
而布瑠部由良ニ止布瑠部如此爲之者死人返生^失也
も有る此ハ天^神本紀にも見えて神武天皇の大御世
の事少くハ有れども天神の御許より十種神寶を遣
らせらるる小^業就て其神業も授奉らせ給へる者小
して此小至りて天鈿女命の傳へ給へり鎮魂の式

小野官年中行軍
小向宮者衛
宇氣之間開御
服箱板動云

小合せ令行給へる者少く有ける弘仁式小當日薄暮
内侍經奏略向宮内者^省衛宇氣之間藏人開御服箱板^振動
とも江次第小神祇官一人進結系納於葛箱^白此間
女官藏人開御衣管振動とも見元兵範記小次神祇官
一人入結系葛箱置下官座前御神樂之間又參進結之
自一至十滿百事畢^中女官等奉出御衣内侍等歸參又
薩成記^成記載る深山御記小女官人起解御衣管細以蓋
開^覆覆^開之^次第^振動置^之と有ハ古小十種神寶を振動し一
れ遺削りて其始ハ玉緒瑤ニ小振動し給へる小
起れる者ありけり天武天皇十四年^上御紀小是日爲天

余小引る室壽御
 詞小御心之盛也
 と華 有る
 續記第四十五話
 汝等乃心半等能
 信直之と有る如く
 心の足行 事少
 靈振の事小異
 功と云る者少
 五母二十五十賜王
 當時歌小御奏
 乃波都祈乃家布
 能多舟波波侍年
 尔等流可良介由
 良父多麻能をも
 有る由良も有る
 由良三心同
 動の義小振
 相等しく魂を齊
 ふる云者

見元史記小修
 振年有正義
 小振敷也

皇招魂之と有と美多麻布理志伎之訓三古語拾遺小凡鎮
 魂之儀者天鈿女命之遺跡も有少天四時祭式の鎮魂
 祭之見えたる鎮魂をバ意富美多麻布理も有るとハ
 御靈振振大御靈振の義ふるも皆右小本著たる古の称
 めるむ有ける万葉十六三十小多麻之比波安之多由
 布敵尔多麻布禮掃安我年祢伊多之古非能之氣吉尔
 有ハ魂ハ朝夕小靈振比ど我胸痛一戀の聲きあし
 云事ハて多麻布流ハ其鎮魂の所作を成すを云て年
 祢伊多之ハ右の十種神寶の事小就て天神の若有痛
 所者云ニハ教給い一御事を云る者ふハ振字を登ニ
 能布とハ訓

雑略天皇九年御紀小會兵復大振と有る宗書小振
 擧也奮也と有川歸明天皇九年御紀ハ於是敵年更
 亦振振焉と有る左傳注小振整其徒也と右等ハ整
 める義あり又中庸ハ振字を袁佐年と訓て朱注
 振也と見えたる如し又市流と布申と訓て朱注
 出見童第六一書ハ就若て上四百二覆槽置の下ハ註
 て傳するを見る可し
 せるガ如く鎮魂の祭式ハ一ハ天鈿女命の日神を招
 奉り水一依て定まれる事あるハ皇御孫等の高千穂
 宮ハ初國所知者一程ハ神原御世までハ後女君等
 旃々以て字氣を衝て云ニの所作を爲す事此御戸開
 の當昔の如くしては奉水のけしを天孫本紀神武天
 皇元年の事を云る條小宇摩志摩治命十一月丙子朔

庚寅初齋瑞寶奉為帝后鎮祭御魂祈請青祈其鎮魂之
祭自此而始矣詔宇摩志麻治命曰汝先老鏡速日命自
天受來天璽瑞寶以此為鎮每年仲冬中寅為例有司行
行事永為鎮祭矣所謂御鎮祭是也凡鎮祭之日猿女
君等主其神樂舉其言大謂一二三四五六七八九十而
神樂歌儻之緣瑞寶蓋謂斯數と見えたる如く此より
一と十種神寶の十と神樂の十と相合せて仕奉る事
と成て其儀式備はれる者と見えたる若て後ハ物
部氏衰へて其職掌神祇伯小歸一猿女氏其職を失ひ
て御巫小相習はる事小心を著て見以て行く小鎮魂

祭儀ハ神祇伯以下略升自東階置神寶於臺上と有ハ
謂ゆる十種神寶を石上神宮より召上せしむる事
可一伯命琴笛相和御巫始舞每舞巫部舉舞三廻
譽云尚奈大藏録以安藝木綿二枚實於管中進置伯前
御巫覆下氣搯立其上以拵撞槽每十度畢伯結木綿鬘
訖御巫舞下と有る其以拵撞槽ハ江次勢ハ衝宇氣神
遊之儀也神代上卷宇氣船不美止ハ呂加領義也此賢
木衝船也又賢所推記ハ供奉侏鎮御魂祭其神所行事
立廻賢木其中伏船御巫登此船上以金付木歌合儻と
有ハ如く右ハ此の天鈿女命の遺跡ありける者あり

毎十度畢伯結木綿鬘と有ハ江次第小神祇官一人進
 結糸於葛篋自一此間女官藏人聞御衣篋振動て有て
 注の結糸自一至十字麻志麻治命十種神寶接之返死
 之縁也用糸自一至十許之也と見えたる如く此等ハ
 十種神寶成就たる所作ありける者あり然れハ古語
 於遺小凡鎮魂之儀者天鈿女命之遺跡と有ハ猿女君
 の職掌成就て云る小ころ有けれ其式ハ右小云るが
 如く天鈿女命の神樂の式と饒速日命の鎮魂の速と
 合せて後世の鎮魂祭式ハ立たぬける者あり一故
 係本紀小凡敬鎮祭之日猿女君等主其神樂與其言大
 謂一二三四五六七八九十而神樂歌舞を縁結糸蓋謂

謂斯敷と云り其意ハ一二三四五六七八九十と云て
 字氣を撞く事ハ上四百二十八頭神明之憑談の下
 の詞あり若て上り引る職員令集解小見えたる事
 天神本紀あり天神御祖詔授天璽瑞寶十種云二天神
 御祖教詔曰若者痛處者合十寶謂一二三四五六七
 八九十而布瑠部由良由止布瑠部如此為之者死人
 返生矣是則所謂布瑠之言本矣と有る此ハ十種神寶
 合せて一二三四五六七八九十と云事あるを明
 成せる由を云る者あり此其二事の一の成れるを明
 せる備鎮魂祭ハ夫天鈿女命の神樂して日神を招奉る
 一と由の縁りて天照天神を主と祭奉りて世給へる御
 事あり右小引る賢所雜記小天照大神閑夫若磐戸隱坐
 之時略天鈿女命日影為纒取竹丰球石屋戸伏禮擗舩
 置而踏登動搖為神樂八百万神一共咲之十一月鎮魂此由也

二千^干是觀之神^新賞會神態之前冥日供奉件鎮御魂祭其
神所行事立廻賢木其中伏船御巫登此船上以金付木
歌合舞娘女亦舞唯似彼義良有以也と有る其神とハ
上小夫照太神云こと云るを受たるを以知へき事
又下^{四百四十八}註る鎮魂歌の中不能保理麻須登申比
流賣我美多麻保領母登波加那保古領真波伎保古と
有ハ上の坐す豊日女神の御霊を敬する爲小宇氣を
撞たゆハ著鐸たる金矛あゆハを今ハ木矛ハ代用
ひて祭るとあり又前張の書目歌ハ如何許り宜き思
業爲てり天照す日女神を暫時止め心と歌ふあり

合真俗文談^神
八神鎮座^神
小其八神^神
時九神也^神
の大直神^神
當たる者^神
小ても九神^神

神樂鎮魂共小天磐戸の故事を傳へて日神を祭奉る
御事とあり主とハ爲たゆける故ありける一然るを
四時祭式鎮魂祭條小神八座と有て下小神魂高御魂
生魂足魂魂留魂大宮賣女御膳魂辞代主と書一又小
大直神一座も見元て都て九神ありて日神の御事の見
えさせ御在り坐ざるハ大直神ハ大直日神小御在り
坐て其和御魂小渡らせ給へば此神を請り申さば
て日神の御霊を祭らせ給ふあり然る小大膳職式
小鎮魂祭^{皇台宮東}神八座大直神一座座別東鯨十三
兩^{大直}鳥賊三兩一分^{大直日如}聖魚六兩^{大直神信}
三兩二分

鮭一隻大直神加鯛脯二斤五兩腊三斤二兩大直神倍海十兩
 大直神加云ニト有之考る小物毎小大直神倍ト有ハ
 十一兩此を二神の料小克充らぬたる少合せて十座の積積なり
 又大炊寮式亦同小鎮魂祭東宮神八座大直神一座右座
 別米一升用宮田稻と有る此も十座の積積なり如何
 ともぬハ田合義解小束稻春得米五升也と見元たぬ
 ハ二束の米一斗ぬ此を座別の各一升と爲る時ハ
 其數十員ぬ此を以て神直日神大直日神二座を合
 せて大直神一座とニテハ申し習へぬ其實ハ祭
 る所十神の御在し坐すハ彼十種神寶を神体として

祭奉れるの起ぬる少て其將正小神武天皇の大御世
 小の御事御事ルて有べり但右の九座の中
 降降章降第一書小高皇產靈因勅曰吾則起樹天津
 神籙天津神籙降於葦原中國吾孫奉齋焉有
 宣持天津神籙降於葦原中國吾孫奉齋焉有
 古語拾遺神武天皇從皇天二祖之詔建樹神
 宮離神事代主神御神以上今御正所奉齋也と見元
 九る天皇の大御字護神小御在し坐せば此神小就て
 御天降の始小鎮魂の御祭ハ行ハぬけぬを右の天
 神本紀小見元たる十種神寶の御事小因て其鎮魂祭
 の特小限りし右の十種神寶を立て御神体と
 て齋奉らるる御若て職員令神祇官條鎮魂義解小謂
 事と所見たぬ鎮安也人陽氣曰魂ニ運也言招離遊之運魂鎮身體之
 中府故曰鎮魂と有る猶集解小鎮安也言如前駐後殿

也凡人之陽氣曰魂魂運也人之陰氣曰魄魄自也然則
召^復離遊之運自合鎮神体之中有故曰鎮魂唯舉魂爲例
則可知有魂故不謂魂魄耳と見えたり但鎮魂祭とハ
此山所見たるが如く日神の響戸を閉て閑居一を招^{モリ}
復一奉り小本著て人の精神の離散を招復一鎮む
る此の事あり然る魂魄の説の言痛し論め小ハ及
ぶ早ト事あり一通ハ此を云む小先管家名義杖
ハ魂を衰多麻志比魄を賣多麻志比と見え又魂魄の
二字を合せて多麻志比と有る此ハ精神を陰陽ハ分
ち分けたる古言と聞ゆ其魂ハハ魄此ハ從ハ魄ハハ

魂此小著て相離れざる故小常小多麻志比と云ハ
其を一ハ惣たる名あり若て集解ハ鎮殿也言如前駐
後殿也と云るハ魂魄を相離れしめず一ハ統るを鎮
魂ハ云意ある可きハ大ハ其意味有リ譬へハ物を視^ミ
聽^キせんと欲するハ魂の^伸出るありて前駐の狀あり已ハ
視聽するハ即魄の引入るありて即後殿するが如くあ
ればあり然れハ魂魄ハ天地の如く日月の如く男女
の如く夫婦の如くして何れハ一相離ると時ハ其壽
祚^域を得保つ可うざるが故小其を鎮むるあり此鎮
魂の旨ありける天孫本紀ハ初齋瑞寶奉爲帝ハ鎮祭

御魂祈請壽祚其鎮祭之祭自此而始兵略自天受來夫
聖瑞寶收此為鎮略有日行事永為鎮祭在所謂御鎮祭
是也と有る鎮是あり又此とハ別ある事ありとも顯
宗天皇御紀室言御詞小築立稚室著根突立柱者此家
長御心之鎮也取擧棟梁者此家長御心之柱也取置椽
檼者此家長御心之齋也取置蓋蓋者此家長御心之平
也略と有て御心小鎮と云ハ鎮魂の義小通ひ林ハ今
策して心小勇有を云あり齊ハ上の御靈振の振を整
めめと云る是あり平ハ謂ゆる魂魄ハ過不及の事無
して精神の平和あるを云あり万葉二丁三十一小貞本柱

太心者有之香掃此吾心鎮來自金津毛も有也物小意
ある事有る時ハ其精神の鎮いざるを云あり心皆此
事ハ係て辨へ置べき事あり右の義解の支小魂
云ハ我魂の魂遊る事小云ハ本すめの事あり
ら祈年祭詞玉留魂神の心註せるが如く其神も人
身の中ハ靈性を積るに給へる由の御名あるが其
天神の神靈ハ一も天地の内ハ充滿て御在るを我
ハ招く意も有る但運と云字ハ又其意ハ遊魂為變
次ハ云を見べし但右の文ハ易繫辭小遊魂為變云
其小魂遊て成せる者あり謝靈運曰精氣之為物字
魂為變也遊魂言其遊散也と有る然ハ鎮魂を美多
例の西戎の校意あり甚言痛し然ハ鎮魂を美多
麻布理と訓むハ玉留魂神小乞て御靈を殖一齋ある
義あり可く美多麻志豆米と訓むハ離遊ると魂を招

才鎮むる我ある可一万葉十二二十小山菅之不止而
公才念可母吾心神之垣者名寸古今集雜下小籠き
一袖の中や入小けむ我々精神の無き心ち爲す又
竹取物語小精神を止めたる心ちしてある歸せ給
ひけるふど有ハ即其離遊を云ふ川其歌を取て
物思ふ小離遊ることハ實小ころ今ハ現心も無き心
ちして云ふて云ひ歌小離遊ること我々精神も返ゆふ
も思ふ邊小結び止めよ又魂一ひの通ふ邊小非ずと
も結留めよ下賀比の都萬と見え伊勢物語も思餘
り出に一魂の有ふるむ夜深く見えハ魂結び爲よと

と有川源氏葵卷小物思ふ人の魂一ひハ實小離遊が
るこ物ふふむ有けると馴うーげ小云て難さ仕ひ空
小乱るく我が魂を結び留めよ下賀比の都萬と有るを
細流小魂一ひの出めるを結び留むる事有ぬふあり
結び留めよとハ浮るこ心を本心小返一給へも託出つ
意ふゆと云ひ袋草紙小見人魂歌魂ハ見つまハ誰と
も知ぬとも結び留めよ下賀比の都萬三返誦之男ハ
左女ハ右の齋ツを結びて三日を經て解之と有り此事
又拾芥抄小も見ゆ又千載集小戀死ふハ浮ぬも魂ハ
暫間九小我々思ふ人の給小留ま此又君戀ふと浮ぬ

晴彦日記小或人
 女神小衣袋
 奉るる言つた
 然為給へど高
 来て進めし
 氣試み山と
 の籠衣三籠
 下交共小籠
 天の神小籠
 出隔て半小籠
 成す所小籠
 則に衣袋
 返て我下衣袋
 右小同

打 總

る魂の真夜更更て如何なる結結つれぬむむああども
 有て人魂を見たる時ハ衣の縫縫ふ事の有を趣向
 小一たる歌共ああの又續後拾遺集小男小忘りりて待
 ける頃頃貴貴船船の請少少て御手洗河河小螢の飛侍侍けるけるを見侍侍
 物思へバ澤の螢も我身より離遊り出る魂とどる見
 る御返一明神奥山小激りて落る龍津瀨の玉散る許
 物忽思ひるあど有も人魂の離遊る事と云るあの
 又空穂國讓卷小然も為む方無く惑ハれ侍めしらバ
 魂を鎮めむと度ニ唯御文件一件を見給へむと云ニ又
 俊蔭卷小口無くらハ何處すめる魂一通ハむ腹無

くてハ何處ある心の有むあと有る北此等ハ皆つら小
 鎮魂の事ハ非水ども皆魂小離遊ららと云ひ通
 ふと云ひ浮るとと云ひ出りと云ひ浮水出又浮め
 る又離遊れ出る又玉散る係て魂散ると云ああどハ上
 小引る義解小離遊之運魂と云小實小當れり又其小
 就て返めあむ又結留めよ又鎮めむ又柳都萬小止るれ
 あど云らハ招字當めて此鎮魂も云る是あり又其
 結ひ為るあどハ鎮魂祭儀小以持撞撞毎十度畢伯
 結木綿髪と云事の遺制のて此ハ人魂を見たる時小
 當りて常小物為つる事あめり右の空穂小口無てハ
 何處すめる魂一通

す春ハ金鉾末ハ木梓^ニと有る此ハ櫓を撞く所の歌不
り初ニ句ハ万葉^ニ二十^ニ小天照日女之命を云指上
日女之命^ニ有る同意あり御霊歿すとハ御霊を招奉
る事を云あり五小三輪山小在立てる茅草^{チガヤ}を今榮元
でハ何時^ニ榮元むと有る茅草ハ茅纏之稍小結る料
あると云ありむ六小我妹子が穴師の山の山人と人
も見ろが小山鬘せよ是ハ上^{三四}ハ引る神樂採物
葛歌あり此ハ鬘小寄せて仙人の如く生^長する事を祝
ふあり七小玉管の本綿取垂て多麻知取らせよ御霊^{ミタニ}
上^カの霊^{ミカ}上^{ミカ}坐^{ミカ}中^{ミカ}神^{ミカ}ハ今^{ミカ}来^{ミカ}坐^{ミカ}ると有る玉管の事ハ

今天神本紀小布
瑠部由良^{ミカ}止
布瑠部如此為之
者死人反生無
と有る意味有
る此即神祖
今鎮魂奈美餅

次小云べ^ニ多麻知登良世與ハ霊を千二小取せよ小
て御霊上^{ミカ}の霊上^{ミカ}の坐^{ミカ}神の來坐るを返^{ミカ}奉るあり小
て此即謂^{ミカ}の招離遊之還魂鎮^{ミカ}身体之中存^{ミカ}と云事不
り八小御霊^{ミカ}思^{ミカ}小在^{ミカ}神^{ミカ}ハ今^{ミカ}来^{ミカ}坐^{ミカ}る玉管持て去
たる御霊還^{ミカ}成す也と有る初ニ句ハ鎮魂奈美式小
神八座^{ミカ}大直神一座と有る其神等の御霊祭見小幸
行せる御事を申せるあり玉管持て去れる御霊とハ
去年の鎮魂小封^{カク}めたる御霊を齋戸小收め置る事を
去給へると云て其を魂返^{ミカ}爲すと云義あり也其
霊返^{ミカ}と云事八十種神寶小死反玉^{ミカ}と云有る其事を會

耳乃皇詠先歌忽不見矣略下有之此ハ武埴安考ガ謀
反カけて爲る事を天皇小知らせ奉る童謡ありて古事記
中も見无なるガ今此事小就て云時ハ飯迺飯鳥塙ハ
己之緒オノガチ半ハ而ハて即齋戸小鎮させ給へる結御魂緒あり
志齊務シサキ吉ヨシ豊トヨ殊ツル末マタ白シラ志シ羅ラ珥ヰハ天皇を死せ奉るむ盗
ちも不知あり比賣那ホトメ素ホ寐メ殊ツル望ノゾミハ女メ遊アソビ爲ナ小コ然シカる
危ヤブ事コトの有アをも所知チカ有リ御ミコト在ニ坐マけル御ミコト言コトハ御
奉給へる小コで此歌ウタハ天照大神ノミコトの御ミコト諭コト言コトある可シ此
小類コトなる事ハ三代實録小貞觀二年秋七月二十七日
甲辰偷兒開神祇宮西院齋戸神殿盜取三所齋戸衣并

ま上結御魂緒等と有る此も御魂管ハ偷兒あどの心
を掛べき物ハ非す其を盗去ると云ハ天皇の御魂
を廢クし奉りて御壽祚を過スり奉りあし誰ナ々邪
心有る人の所爲あり可シ右の如く童謡と成リて神
の諭コト申給へるを以てハ御魂緒を結びて鎮奉らせ
給ふ時ハ決めて壽祚を祈請給ふ正シき驗有田又其
御魂管を人の盜スり去リルル爲る時ハ竟シりて天皇
の大御身小殃災の御在ニ坐マす御事の趣ある以てハ
其物の少綴ありぬ御事を曉る可シあし有ける所以
小其鎮魂祭の時小其を持運ルる小迄キも甚シ心ヲ著シて

青政官
内庫

内書
内庫

慎一三ける事と見え東宮年中行事十一月申子日
條小此日夕内侍代略宮内省少行向ふ行事の藏人相
従ふ御衣ハ衣管の蓋小入奉りて御裏小包してハ足
の上小置く御魂結の糸を具一ためハ足小掛る白き
衣覆着の長一丈五又又足纏の布有少御衣管をバ道
の程落さるむか爲小ハ足小結付ため其結をハ丈夫
小儲く絹を細く疊たなるあり女官此を申して疊む
料の絹ニ丈あり下略と有る此を過さつ時ハ心も善
くめ事共の有ればある可一況て天皇の御魂緒と
して齋戸小鎮めさせ給へる少ハ此上無き駱駱の御在

